

農薬豆知識

病気のお話 《てんさい西部萎黄病》

2009 年は天候不順で各作物に影響が出ていますが、冷害に強いてんさいに於いても根重がいまいちとの話が聞こえ、とても残念です。今回はてんさいの西部萎黄病の話ですが、車で走っていると今まで発生が無かった地区でも黄色くなった葉をちらほら見るので、発生面積が増えているようにも感じます。



スポット状に発生した西部萎黄病

Q1: 西部萎黄病の病徴は？

A: 7 月上旬～下旬頃から、てんさい畑でスポット状に葉が黄化し、生育後期の 9 月以降は葉の黄化症状がはっきりします(写真参照)。



葉の黄化症状

Q2: 発病が多い地区は？

A: 2008 年、十勝管内と網走管内で広く発病が見られました。過去においては、1960 年代にかなりの地区で発生があり、その後は少なく推移していましたが、1991 年と 1992 年に胆振、後志、石狩管内で多発し、伊達市とその周辺では全面発生した圃場も多く、かなり大きな被害がありました。

Q3: 発病すると被害はどの程度？

A: 2008 年多発した北見管内の調査では、発病株は健全株に比べ根重が 25%、糖分が 10%(2 ポイント)、糖量が 30%減少しました。

Q4: 感染経路と防除法は？

A: アブラムシ(主にモモアカ)が、ビート西部萎黄ウイルス(Beet western yellows virus)を保毒し伝搬します。感染源はてんさい、ほうれんそう、はくさいなどの残さ、ハコベなど雑草の一部も感染源になる可能性があるため、それらの清掃も対策になります。なお、アブラムシは秋になると産卵し越冬しますが、卵から孵化するアブラムシにはウイルスは伝搬されません。しかし、冬季も張りっぱなしのビニールハウスがあると、アブラムシは保毒したまま越冬できる可能性があるため注意が必要です。種子伝染はしません。



モモアカアブラムシ

農薬による防除法は、移植前の苗床灌注でアブラムシに残効の長いネオニコチノイド系殺虫剤を使用すると被害が軽減されます。登録がある薬剤は、アドマイヤー顆粒水和剤などです。多発地区では 6 月中・下旬のアブラムシの発生を確認して、茎葉散布も視野に入れます

Q5: そう根病、黒根病との見分け方は？

A: 両病害とも葉が黄色くなる点では同じですが、西部萎黄病は葉脈だけが緑色を残し、後半になるとデコボコして硬くもろくなります。そう根病は細根が異常に増加する病気ですが、株全体が小ぶりになりますので、症状が進むと違いがはっきりします。黒根病は根の地中にある部分から腐敗し、ひどい場合は地上部が萎凋します。



緑色を残した葉脈

余談ですが、西部萎黄病の西部とは、アメリカ西部(カリフォルニア)で発見された病害であることからそ

の名称が付いたとのこと。また、西部は「にしぶ」ではなく「せいぶ」と読みますのでお間違えなく。
(2009年11月 そあら一記)

参考文献

・「北海道病害虫防除提要」 北海道植物防疫協会